

国語部会 研究の構想（案）

平成30年度～

I 研究主題

言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいか。

II 主題設定の趣旨

国語科は国語の能力を育成することを目標とした教科である。国語の能力とは、国語で正確に理解し、適切に表現する能力であり、人との関わりの中で互いを尊重して思いや考えを伝え合う力、言葉を手がかりに論理的に思考する力や豊かに想像する力、言葉の価値を認識し、国語を尊重する態度、言語文化に親しみ、享受して言語文化を継承・発展させる態度等を含んでいる。

国語は、思考や感性、コミュニケーションの基盤である。私たちは普段、理解・表現の手段として国語を用いており、日常生活においてコミュニケーションに不自由を感じることは少ない。そのため、言葉そのものを強く意識することはあまりない。また、国語科の直接の学習目的は、様々な事象の内容を理解することではない。生徒にとって国語を学習する意義が見えにくいのはこのためである。言葉を通して理解・表現すること、またそこで用いられる言葉そのものを対象とする国語科の学習では、生徒が言葉による見方・考え方を働かせる必要がある。言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、日頃はあまり意識しない対象と言葉、言葉と言葉との関係に気付き、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして言葉への自覚を高めることである。

「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する」とは言葉自体を学習対象として取り上げ、これを強く意識しながら課題を追究する中で、言葉にこだわり、言葉を基に考えようと生徒が意識する姿である。具体的には、言葉で表されている内容について、「そうした考えはどのような叙述から分かるのか」「この思いを伝えるにはどのような言葉を用いるとよいか」「この状況で使われているとき、この言葉はどのような意味をもつのか」などを考えようとするのである。

平成27～29年度は、それまでの成果を踏まえ、研究主題を「言語活動を通して、生徒が主体的に思考・判断・表現しながら、言語能力を高めていくための指導はどうあればよいか」とし、研究を進めた。その結果、言語活動を通じた指導が生徒の主体的な学びを促し、表現することの達成感や言葉への関心を高めること、また、他者との交流を意図的に取り入れることは自分の考えと他者の考えとの比較を促し、新たな気付きを生んだり考えの見直しを図ったりすることに有効であることが確認された。一方で、一人一人の生徒の言葉に対する主体性を育み、国語の能力を高めることにつながる言語活動については、更に工夫・改善する余地がある。

これまでの研究の成果と課題、さらにはこれから求められる資質・能力等を踏まえながら、生徒一人一人に必要な力が確実に身に付くような授業の構築が求められる。国語の能力を高めることを第一義とする国語科の教師は、自身が生徒にとって身近で重要な言語環境であることを自覚することが必要である。その上で専門性を発揮しながら生徒の国語の能力を高めることを目指し、研究を進める。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

国語科では、指導事項として示されている力を言語活動を通して指導していくことが求められている。そこで、生徒が言葉に対して自覚的に思考・判断・表現しながら、国語の能力を高めていくための指導の在り方について、授業実践における生徒の姿を基に研究を進める。

2 研究内容

- (1) 付けたい力を明確にする研究
 - ① 学習指導要領の趣旨と各領域の指導事項やその系統性を理解する。
 - ② 実態を踏まえて付けたい力を明確化・焦点化する。
- (2) 言葉による見方・考え方を働かせる教材研究や単元構想の工夫
 - ① 教材の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ② 取り入れる言語活動の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ③ 生徒が言葉を意識しながら思考・判断・表現できる学習課題を工夫する。
- (3) 言葉について「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動の工夫
 - ① 生徒が学習に見通しをもったり学びを振り返ったりする場面を設定する。
 - ② 一人一人に思考・判断・表現する機会を保障する学習過程や学習形態を工夫する。
 - ③ 課題解決の過程に位置付ける交流活動を工夫する。
- (4) 身に付けた力を適切に評価するための研究
 - ① 生徒の具体的な姿や表現例を想定した評価規準を作成する。
 - ② 授業で付けたい力を適切に評価する問題を作成する。
 - ③ 評価問題の解答類型等の分析により、今後必要な指導を明確化する。

国語部会 平成31年度研究計画（案）

I 研究主題

言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいか。

－言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり－

II 主題について

平成30年度は、「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動」が展開され、生徒の国語の力を高めようと授業実践を行ってきた。

- ・随筆を読む学習では、登場人物の心情について漠然と考えていた生徒に、「どの表現によるものか」を意識するよう指示し、人物の言動に着目しながら文章を読み返す活動を設定した。
- ・言葉に関するレポートを書く学習では、書き進める際に、なぜそのような項立てをするのか、どの内容を伝えるために図表を挿入するのかなど、無意識に判断していることや工夫について自覚できるようにレポートの周囲に書き込ませた。

上記の事例では、「読む」「書く」活動について、学習者が言葉に対して自覚的に思考・判断・表現できるような学習課題や学習活動の工夫がみられた。しかし、いずれの郡市ブロックでも、「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する」ことにおいて、「言葉に対する自覚」について十分な理解がされないまま実践されていたという課題が残った。

「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する」の「言葉」とは、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものである。「言葉を通じた理解や表現」とは、例えば、小説に登場する人物相互の関係を読み取ることであったり、感謝を手紙で伝えることであったりする。また、「そこで用いられる言葉そのもの」とは、文や文章、発話等、言語で表現されたまとまりの場合もあれば、文末表現、語句、文字等、比較的細かなものの場合もある。ときには助詞一語に対して「自覚的に思考・判断・表現する」ことも考えられる。言葉は言語内容と、それを表す言語形式をもっている。言語内容とは「何が書いてあるか（話されているか）」「何を書くか（話すか）」の「何」に、言語形式とは「どのように書いてあるか（話されているか）」「どのように書くか（話すか）」の「どのように」に相当する。したがって、国語科では、言語による理解や表現の場面を設定し、言語で表す内容とその内容を表すための形式との関係について着目し、それについて適切な思考・判断・表現を目指すように指導する必要がある。

私たちは日頃「今、自分はその内容を伝えるために、どのような形式にし、工夫をしたか（選んだか）」「このように書いてあるからこそ、この文章からこういう様子が想像できるのだ」等と強く意識して言語生活を送っているわけではない。日常的に文章を読んだり話合いをしたりする場合には、言葉はツールの機能が優先され、内容を理解したり、伝えたりすることに主眼が置かれる。しかし、国語科では、言葉に対する自分自身の「思考・判断・表現」を自覚させ、より適切な理解や表現を求めていくことができるように指導することが大切である。対象との関係の中で、言葉は理解や表現に働く。生徒はこうした言葉による見方・考え方を獲得・更新していくことで国語の力を高めていくことになる。

生徒の実態としては、基礎的・基本的な知識及び技能は概ね身に付いているが、具体的な言語活動の中でそれらを適切に活用することには依然として課題が残されている。平成30年4月に行われた全国学力・学習状況調査では、伝えたい事実や事柄について、根拠を示すことは意識されているが、根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味することに課題があることが明らかになった。また、同時期に行われた中教研学力調査では、自分の考えの根拠となる事柄を適切に書く力や段落のつながりを考えながら論理的に書く力、筆者の主張を文章の流れの中で大きく捉える力、読み取ったことや考えたことを記述する力に課題がみられた。問いに対する答え方、キーワードや対比・類比表現、指示語等に注目して記述する指導、段落の構成やつながりを考えて論理的に文章を書く指導、語彙の量を増やしたり、語感を磨いて語彙を豊かにしたりする指導を一層充実させていく必要がある。

副題は「言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり」を継続する。学習者が主体的に言葉に着目し、言葉に対する見方・考え方を働かせることができるようにするために、指導者には学習課題や学習活動を適切に設定することが求められる。付けたい力に結び付き、振り返りの際に学びや変容を自覚できる学習課題を工夫すること、ねらいの達成に向けた効果的な学習活動を設定する必要がある。

言葉に着目することで、言葉に対する見方・考え方が鍛えられ、日常生活や授業で行われる言語活動の質の高まりが期待できる。指導者は国語科の本質である言葉の指導を強く意識するとともに、教材研究や単元構想を周到に行い、一人一人の言語能力を高める指導について研究を進める。

Ⅲ 研究内容とその視点

1 付けたい力を明確にする研究

- (1) 学習指導要領の趣旨と各領域の指導事項やその系統性を理解する。
 - ① 各領域の指導事項や各学年における指導内容や言語活動例の系統性について具体的に解釈する。
 - ② 付けたい力が学力の資質・能力のどれに位置付くか、またそれらの相互関係を明確にする。
 - ③ 国語科の学習用語（例：「要約」「批評」「根拠」等）について正確に理解させ、指導に活用する。
- (2) 実態を踏まえて付けたい力を明確化・焦点化する。
 - ① 生徒の身に付けている力や学習状況について実態を把握する。
 - ② 小学校や前学年までに身に付けている力の診断的な評価や意識調査を実施する。（小教研学力調査等の結果を踏まえる。）
 - ③ 各調査等の結果から指導が求められている能力を的確に把握する。

2 言葉による見方・考え方を働かせる教材研究や単元構想の工夫

- (1) 教材の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ① 教材の話題や題材を工夫する。（生徒の実生活と関わりのあるもの、言語への興味・関心を喚起するもの、内容的価値のあるもの等）
 - ② その教材が、付けたい力を指導するのにふさわしいものかどうかを吟味する。
 - ③ 付けたい力を指導するのにふさわしい教材を開発する。
- (2) 取り入れる言語活動の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ① その言語活動を適切に行うにはどのような国語の能力が必要かを吟味する。
 - ② その言語活動が付けたい力を指導するのにふさわしいかどうかを吟味する。
- (3) 生徒が言葉を意識しながら思考・判断・表現できる学習課題を工夫する。
 - ① 言葉への自覚を促す学習課題の設定や提示を工夫する。
 - ② 付けたい力につながり、振り返りの際に学びや変容を自覚できる学習課題の提示や設定の工夫をする。

3 言葉について「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動の工夫

- (1) 生徒が学習に見通しをもったり学びを振り返ったりする場面を設定する。
 - ① 学習の目的や見通しがもてる導入を工夫する。
 - ② 自分の学びや変容について客観的に振り返る終末を工夫する。
 - ③ 生徒が互いのよさや学びを認め合う相互評価を工夫する。
- (2) 一人一人に思考・判断・表現する機会を保障する学習過程や学習形態を工夫する。
 - ① 一人一人が自分の考えをもつ時間を十分に確保する。
 - ② 自分の考えを話したり書いたりする場や機会を増やす。
 - ③ 思考・判断・表現を促す板書、発問、ワークシートやノート指導を工夫する。
- (3) 課題解決の過程に位置付ける交流活動を工夫する。
 - ① 何を目指し、何について議論するのか、ねらいの達成に向けた効果的な交流活動を設定する。
 - ② ねらいに応じた適切な学習形態を工夫する。

4 身に付けた力を適切に評価するための研究

- (1) 生徒の具体的な姿や表現例を想定した評価規準を作成する。
 - ① 活動の様子ではなく、付けようとした力を評価する。
 - ② 評価内容・評価の判断基準・評価方法・評価場面等を想定しておく。
- (2) 授業で付けた力を適切に評価する問題を作成する。
 - ① 授業に沿った定期考査問題を工夫する。
 - ② 「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」等、見えにくい能力の評価方法を工夫する。
- (3) 評価問題の解答類型等の分析により、今後必要な指導を明確化する。
 - ① 「努力を要する状況」の生徒に対して支援する。
 - ② 「十分満足できる状況」の生徒を伸ばす指導を工夫する。

Ⅳ 研究方法

- 1 県、郡市や学校単位で指導案や指導資料等のデータベースを作成し、収集、整理、提供の円滑化を図る。
- 2 郡市や学校単位で、指導計画、授業や実践事例等について協議、情報交換し研究を進める。
- 3 全国学力・学習状況調査や中教研学力調査を活用し、研究の推進及び指導の改善に努める。
- 4 実践的に研究に取り組み、成果と課題を明確にすることで、指導内容と指導方法の改善を図る。

